

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

平成三十年二月三日(土曜日) 午後二時三十分開演

演目解説 (石川工業高等専門学校准教授 佐々木 香織)

狂言 蟹山伏(かにやまぶし)

大峰・葛城の修行を終えて意気揚々と下向する羽黒山の山伏が、強力と二人でもものさびしい深山にさしかかりました。どうどうと鳴る音がし、真っ黒になったかと思うと、謎めいた名乗りをし、横に跳ぶ者が出て、これを蟹の精と解いたまでは、山伏もさすがに生き不動です。ところがちよつかいを出して蟹に耳を挟まれた強力を助けようと唱える呪文は怪しげですし、効き目がないばかりか自分も耳を挟まれ、二人とも突き倒されます。

能 清経(きよつね)

豊前ぶぜんの国柳が浦で入水した平清経の遺髪を持ち、御内みうちに仕える淡津の三郎(ワキ)が上京して、北の方(ツレ)に最期のさまを報告します。戦死でも病死でもなく自ら命を断つたと聞いて、北の方は夫の裏切りを悲しまずにはいられません。生きて帰り添い遂げる約束が偽りとなったからです。遺髪を前に涙にくれ、思いは募るばかりです。夢になりと再会したいとまどろむ北の方の枕上に、清経(シテ)が現れました。妻が夫の違約を恨めば、夫も妻が以前、形見の黒髪を送り返した仕打ちを難じ、それを見るたびに心を尽くす妻の辛さも言い添えられて、かこちかこたれ、相逢う夜なのに一人寝が悲しまれます。気を取り直して清経が、宇佐八幡の託宣に平家滅亡を確信し、この世も旅と思いい切って、西海に身を投げた経緯をたどり返して聞かせます。執着を捨てた清経は語るうちにも一時、修羅の苦患くげんに襲われますが、最期の船で十念を唱えた功德によって、心清らかに成仏します。(金沢大学人間社会研究域教授 西村 聡)

装束附 シテ(左中将清経)

黒垂をつけ、梨子打烏帽子をいただき、中将の面をかけ、白鉢巻をしめる。厚板を着附に着、白大口をはき、上に長絹又は法被を着て、腰帯をしめる。太刀をさす。